

会議報告書	
会議名	令和4年度 草津市立教育研究所 第1回運営委員会
日時	令和4年6月16日(木) 午後3時30分から午後4時45分まで
場所	草津市立教育研究所 2階研修室
出席者	委員：6名 糸乗 前 、 藤井 泰三 、 雪竹 幸美 片山 恵泉 、 西村 旭生 、 真崎 英香 教育研究所：9名 所 長：木村 弘子 副参事：恒松 睦美 専門員：湯浅 圭太 研究員：杉本 久美香 指導員：西澤 留美子 、 小川 絹子 、 西村 奈那子 スキルアップアドバイザー：清水 康行 、 山崎 賢 、 仲野 忠克
欠席者	委員：3名 成田 陽子 、 中島 昭子 、 橋本 篤典
運営委員会の関連資料	<input checked="" type="checkbox"/> 有(別添のとおり) <input type="checkbox"/> 無
記録作成者	草津市立教育研究所 研究員 杉本 久美香

研究所： 皆様、こんにちは。

定刻となりましたのでただ今より、令和4年度草津市立教育研究所第1回運営委員会を始めます。運営委員の皆様には、公私ともご多用のところ、ご出席いただきまして、ありがとうございます。まず、始めに当研究所の所長木村より挨拶させていただきます。

所 長： 一言ご挨拶を申しあげます。運営委員の皆様、本日は、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

この4月より、私は当研究所に参りまして、前所長をはじめ、これまでに築き上げてこられたものを引き継いでまいりたいと思っております。また、令和の草津の教育というものを見据え、取り組んでいきたいと思っております。

4月から2か月ほど経ちまして、適応指導教室には15名程度のお子様が通っております。スキルアップの方では、小学校15名、中学校10名の先生方のサポートに当たっております。詳しくは、後程、各担当の方からご説明させていただきます。

運営委員の皆様には、忌憚のないご意見を頂戴したいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

研究所： 本運営委員会ですが、傍聴席が設けられますことと、会議の内容が草津市ホームページで公開されますことをご了解ください。次に自己紹介に入りますが、お手元の資料2ページをご覧ください。最初に資料の誤りがございましたので、この場で訂正させていただきます。職員一覧の番号に誤りがあります。4番が2つありますので、訂正させていただきますよう、よろしくお願い致します。申し訳ございませんでした。それでは、運営委員の皆様から自己紹介をよろしくお願い致します。

糸乗委員、藤井委員、雪竹委員、橋本委員、片山委員、西村委員、真崎委員

研究所： 本日は成田陽子様と中島昭子様と橋本篤典様にご欠席となります。よろしくお願いいたします。

続きまして、研究所所員の自己紹介をさせていただきます。

木村所長・恒松副参事・湯浅専門員・杉本研究員

適応指導教室担当…小川指導員・西澤指導員・西村指導員

スキルアップアドバイザー…清水先生・山崎先生・仲野先生（ICT 担当）

本日、指導主事の奥村と相談員の中谷が欠席させていただいております。よろしくお願いいたします。

なお西澤指導員はこの後、事務所で電話・接客対応のため退室させていただきます。ご了承ください。

この後の進行ですが、資料の16ページをご覧ください。草津市立教育研究所規則を掲載しております。第7条に運営委員会の組織に関する記載がございます。3という項目に「運営委員会に、会長及び副会長をそれぞれ1人置き、委員の互選により選出する」とあります。これに則り、会長、副会長の選出をお願いしたいと存じます。どのようにさせていただいたらよろしいでしょうか。

委員： 事務局のお考えはありますか？

研究所： それでは事務局案でございますが、会長には、平成30年度より運営委員を務めていただいております。前年度の会長でもある糸乗委員に引き続きお願いしたいと考えております。

また、副会長には、本日は欠席されていますが、校長会の代表として担当いただいている成田委員という案でいかがでしょうか。ご賛同いただけますなら、挙手をお願いいたします。

#### 委員全員が挙手

挙手多数ですので、会長を糸乗前委員、副会長を成田陽子委員にお願いをします。では、これより規則第7条第4により、糸乗会長に議長として議事進行をお願いしたいと思います。お席のご移動をお願いします。

#### 糸乗前会長 議事席へ移動

会長： それでは、ただ今より第一回草津市立教育研究所運営委員会の議事進行を務めさせていただきます。円滑な議事進行にご協力をお願いします。まずは、本日の運営委員の出席状況を教えてくださいませんか。

研究所： 6名になります。

会長： 本日は運営委員10名のうち、6名の方がご参加いただいております。半数を超えていますので本運営委員会は成立します。

それでは、本会の次第4、今年度の事業概要の説明を事務局よりお願いします。

令和4年度事業概要について各担当者より説明

※別添資料（1）（2）に沿って説明

- ① 研究所の事業概要および研修事業（所員）
- ② 調査研究に関する事業（研究員）
- ③ 教育相談に関する事業およびやまびこ適応教室について（副参事）
- ④ スキルアップ事業（所員）
- ⑤ その他（所員）

会 長： ありがとうございます。それでは、これより質疑に入ります。どなたからでも結構ですので、ご質問、ご意見、ご感想等、合わせてお願いします。

委 員： 調査研究のところで出てきた「わたしたちの草津」について、現物があれば見せていただきたいです。今、子どもたちがどんなものを使っているのか、ぜひ見せてください。

所員から現在使用している副読本「わたしたちの草津」を配布

委 員： 今回の部分改訂では、どういったところを改訂されたのですか？

研究所： グラフや資料のデータ等を新しいものに差し替えました。また、単元ごとに SDG s と関連付けながら、番号を入れています。また、草津は ICT 教育にも力を入れていますので、子どもたちがタブレットを活用して資料や HP が読み取れるように QR コードを掲載しています。

委 員： QR コードは前回の副読本にはなかったのですね。今回の改訂でタブレット学習がより進むように工夫されているのですね。

会 長： すごく大変な作業を先生方がされているのですね。それぞれの項目（単元）ごとに、SDG s と関連づけるだけでも大変だと思います。

委 員： 今回改訂された原稿は見せていただけますか？

所員から部分改訂された新しい副読本の原稿を配布

委 員： デジタル教科書レベルの内容になっていますね。この副読本の内容を電子黒板などに写したりすることもできるのですか？

研究所： 当研究所の HP に副読本の原稿を単元ごとに PDF 化して掲載していますので、そちらから、先生方には授業で活用していただけるようになっています。

会 長： そうすると、先生方は、デジタル教科書のようにそのデータを授業の中で使うことができるのですね。他の教科のデジタル教科書ですら、活用がまだ始まったばかりのところもある中で、とても進んでいることがわかります。

研究所： 副読本の中の内容につきましても、関係機関等に照会をかけながら、より最新の情報になるように1つ1つ確認をとっているところです。

会 長： こうやってデジタル化が進んでくると、教科書をすべてデジタル化した方がいいのか？といった議論も出てくるでしょうね。実際にこうして作って試していくことで見えてくる部分もあると思います。

委 員： 個人的には、教科書をペラペラとめくりながら学んでいく学習も大事ななと思うので

すが、社会の流れもあるのでどうなっていくでしょうね。

委員： 新しい副読本についても電子黒板に写すことができるのですか。

研究所： はい。新しい副読本につきましても、HP でデータを PDF 化して掲載する予定です。今年度は、その副読本に合わせた指導書の作成を編集委員さんと事務局の方でさせていただく予定です。来年度の3年生から、この新しい副読本を使用していきます。

委員： 今の3年生も4年生になったら新しい副読本を使うのですか？

研究所： 今の3年生は、すでに持っている今の副読本を使います。

会長： 指導書の作成に関しても、先生方と一緒に作成されるということでしたが、先生方もこれまでの指導された内容などを反映させながら作成されるということですか？

研究所： 今年度の編集委員を募るときに、これまでに市内で3、4年生をご指導された経験のある方をできるだけ出していただきたいとお伝えして、各校から1名ずつ出いただいています。

会長： ご指導経験を活かして作成されていくのですね。それでは、その他の事業についてもご意見いかがですか？

委員： 調査研究の今年度の研究に関して、授業の内容や授業時間はどのくらい予定されているのでしょうか。また、算数科で実施されるということですが、算数科の学力はいわゆる見える学力だと思うのですが、子どもたちに実施するアンケートでは、子どもたちの主観だけで終わってしまわないかなというのが1つ疑問です。子どもたちの意識に関するアンケートだけでなく、見える学力としてテストやデータなどを実施して分析するようなことはされないのでしょうか？

研究所： 授業内容については、データ活用領域の「帯グラフと円グラフ」のところで実施しようと考えています。今回は、単元の中の本時という位置づけではなく、単元を通しての研究として計画を立てています。単元の導入でパフォーマンス課題を与えて、そのときに子どもたちに課題を見つけるという活動を行います。それが、最初の調査ということになります。おそらく、最初の調査では子どもたちはなかなか課題を見つけられないかなと想定しています。そこから課題を解決するために帯グラフと円グラフに関わる基礎的・基本的なことを単元の前半で学んでいきます。その先の発展として、後半では最初に持った課題についてどのように解決していくのか、前半で学んだことを生かして取り組んでいくということを行います。そして、すべての学習が終わった最後に、また別の課題を見つけるという調査を行ったときに、どのように変わるかというところを研究しようとしています。ですから、今回の研究は、知識などの学力的な部分というよりは、子どもたちが「はてな」を見つける、課題を見つける力がどのくらいつけられるかということを目指してやっっていこうと思っています。

会長： 課題発見、課題解決…探究活動になるのかなと思います。小学校から、探究活動が始まるということですね。今、京都の進学校や高校などで探究活動に力を入れることで、大学への進学率を上げているという情報もあります。中学校でもそのような取り組みに力を入れようとしているところもあります。それを小学校でやってみようというのは、少し難しいのかなとも思うのですが、それに挑戦されるというのはいいと思います。課題を見つけるというのは大変なことなので、そこをどういうふうにするのか、大変興

味深く聞かせていただきました。

研究所： ありがとうございます。

委員： 10月、11月のこの単元でいきなり課題を見つけるというのは、子どもたちにとっても難しいと思うので、個人的にはそれまでに種まきというか、課題を考える機会というのを子どもたちに与えておいてあげる方がいいのではないかと思います。練習などをやっておいてもいいのかなと思います。

だいぶ、話は変わりますが、長野県の方では、イエナプランというものを実践している学校があります。この時間に何を学ぶかを子どもたちが自分で計画を立てて、時間割なども子どもたちで作っているそうです。自分もそんなに詳しくはないですが、広島県でもイエナプランを公立の学校で実践しようとしているけれど苦勞しているというニュースもありました。どうしてもそこまで思い切るのは難しいのですが、この時間の中で課題を見つけようという形になりがちなので、それよりは、これまでの積み重ねの中で課題を見つけようという方がいいと思います。子どもたちとしても、いきなりは戸惑うかもしれないですし、授業者としてもなかなか子どもたちが課題を見つけられなかったら焦ってしまってよくないと思うので、それまでの積み重ねがあった方がいいと思います。

研究所： ご意見、ありがとうございます。

会長： 最初は、ゼロからスタートしてそこから探究していき、最後にできるようになることを目指されているのかなと思います。今、やってみて全員ができることというよりは、できる子とできない子がいる中で、いろいろな工夫を授業の中で行い、体験を通して、できる子を増やしていくことをめざされているのだと思います。どうなっていくのか、楽しみです。

研究所： ありがとうございます。

会長： 他に皆さん、ご意見ありませんか？

委員： 少し違う視点からお話してもいいですか。1つの課題を子どもたちがずっと探究していく学習を提案しておられました。それは、今までの日本の画一的な学習には問題や反省点がいくつもあったからだと思います。私も、それは新しい教育の流れの1つだと思います。でも、私がフランスの日本人学校を訪れたときに、フランスの教育委員会の人たちがたくさん日本人学校に来られていました。なぜ、日本の教育力はあんなに高いのかと日本の教育にとっても関心を持っておられていて、その秘密を知りたいからだと思います。そうして交流をしていく中で、我々日本人は画一的な学びを変えようとしている一方で、フランスの人たちは逆のことをしようとされていることがわかりました。フランスでは、早くから個性の伸長など個々を大切にしていたが、その分教育レベルがなかなか揃わないといった課題が出てきたようです。つまり、それぞれの国には、それぞれの国の課題があるなということを思いました。今の草津でも、新しい流れにのってやっていくというのはとても大事なことだとは思いますが、今までの教育のよさというものやはり忘れないでいきたい、そうしないと大きな落とし穴があると感じます。年長者の私が言うのも何ですが、戦後日本がここまで復興してきたのは教育の力だと思います。それも、子どもたちをある一定のレベルまで上げていこうという意識がとても強かった

のだと思います。そんなことを片隅に置きながら、子どもたちに基礎・基本をしっかり学んでほしいという思いもあります。私の願いとしては、子どもたちがいろいろな課題を追求していくのに、足元をしっかり固めてから進めてほしいと思います。

委員： 今、現場では大量採用の先生方が抜けていき、若い先生方がどんどん増えてきています。活力はとともあります。新しいことに対しても、若い先生方は柔軟に対応して、吸収力もあり、デジタルにも強いです。一方で感じるのは、日本が戦後、大事にしてきた教育技術に関しては、ちゃんと引き継がれているのかなということです。そこをもっとつかめたら、もっと授業はわかりやすいし、面白くなる、もっとよくなるということを感じます。私たちが教師を始めたころは、教科書も白黒の時代で、地図を見せるのでもとても苦勞していました。でも、だからこそ本物を見せたい、よりカラーで対応できないかなど、今とは違う教材研究をしていました。今は、ボタン1つでパッと欲しい情報を与えることができるのですが、そのように情報をどんどん与えるばかりでいいかというところではないと思います。本当に子どもたちに見せたいものをどう見せるか、映像や画像だけでなく押さえない大事な部分を授業でどう勝負するか、子どもたちに学んでほしいところをどうしていくかを考えたときに、ときにはアナログのよさも生かしていけたらと思います。ただ、学ばせるべきこともあるので取捨選択をしていかなければならないのですが。そういう意味では、スキルアップの先生方は若い先生方の授業を見て、たくさんのことを教えていただけて、それがとても大事だと思います。私も自分が指導しているときは、次のテストまでにここまで進まなければ、他の先生方と歩調を合わせなければ、などいろいろ考えていて、やりっぱなしの授業はよくないと言われていたけれど、忙しい中でなかなか授業を振り返ることができないことが多かったです。自分の授業について考えるのは、指定された授業や校内研究の授業のときぐらいでした。日々は追い回されています。でも、スキルアップの授業では、そのようなかしまった授業ではなく普通の授業を見てもらって、「ここがよかったよ」「もっとこうしてみたら」と優しく指導してもらえるので、先生方にとってもよい機会になるとと思います。通常では、他の先生方に自分の授業を見てもらって助言いただく機会はなかなかないので、研究所の皆さんには、それをしていただいていると思っています。有難いなと思っていますし、研究所でもそういうところを大事にしておられるのだなと感じています。

研究所： 今、お話にあったように、まさに草津市では、デジタルとアナログを融合させたハイブリット型の授業を目指していこうということをしています。草津型アクティブラーニングをめざして授業づくりをしています。実際に授業を見せてもらいに行くと、電子黒板をデジタルで使ったり、PowerPointで資料を提示したり、一方で黒板を使って指導されたりしています。

委員： 私たち世代には、そういうの（ハイブリット型など）は、難しいですね。ただ、私は理科を専門にしてきました。理科の授業で子どもたちを外に連れ出して「今日は虫の観察

をしようね」と話しても子どもたちは虫ばかり見てはいないですよ。一生懸命に花を見ていたり、においをかいでいたり、いろいろなことをしています。でも実は、その活動が後の学習で大事になってくるわけです。じゃあ、そういう活動を重視して、外に連れ出すばかりをされていていいのか、それとも「虫のことを学ぶ」と絞り込んで目的に合わせた内容にしていくのがいいのかと迷います。ただ、どうしても今は、効率の良さばかりを考えてしまいますが、私は学習には無駄があってもいいように思います。また、そういう視点も持って取り組んでいただけたらと思います。

会 長： 皆さんの話から、「不易と流行」という言葉が思い浮かびましたけど、やはり大事にしなければいけないこともあるし、新しくしていく必要があるべきところもあるのかなと思いました。今は、両方ができるようになってきたのかなとも思います。本物にふれることも大切ですし、画像でもっと詳しく調べることもできるようにもなったので、草津型のアクティブラーニングの形を模索していけるといいのかなと思います。

委 員： 実際、スキルアップの先生方は授業を見ていただいて、どうですかね？

会 長： 小学校とかで実際に見ていただいているスキルアップの先生方、いかがでしょうか？

研究所： スキルアップで私が心がけているのは、先生方自身が意欲を持ってくれること、それから、先ほどの話にもつながりますが、先生方自身が自分の授業の課題を自分で見つけられるように支援をするというのが心がけて行かせていただいています。委員の皆さんからも先ほどご意見あったように、どれがいい、どれが悪いというのは決められないし、先生方自身が「あそこはもっとこうしたらよかったかな」と気づけるような視点を話したり、学習を深めるための ICT 機器の使い方の例を紹介したりして「こんなやり方もあるのか」と知ってもらおうような話をしています。こんな形で、先生方自身が意欲とやりがいを持てるようにすることが、まず一番の目的です。

研究所： 私も話を聞かせていただいて、子どもたちの周りにはデジタルの情報があふれています。先生方もそうですね。そのデジタルのものを効果的に取捨選択して活用できるかというのがテーマになっていますね。当然、現実のものから学ぶというのは、五感で学ぶということで、課題を解決するための根源的なものだと思います。ただ、そこから子どもたちが写真や映像を撮って、それを拡大してもものを見つけていくとか、インターネットを活用してさらに詳しく調べて興味を広げていくこともできます。学ぶ活動ということが、子ども一人ひとり、そこから派生してどんどん広がっていくわけです。そこから学ぶ力を教師の中で交流させていくというのが今すごく課題になっています。それに、タブレットや ICT 機器をどう活用できるのかということについて教室で支援させてもらいながら、私自身も先生方から学ばせてもらってそれらを他の先生方に還元しています。今は、新たな学びをそこでしていくという過程だと思っています。

会 長： ありがとうございます。他にご意見はありませんか？

委 員： 今、我が子が中学生になって子育て真っ只中にあるのですが、中学生の子どもたちがやまびこ教育相談室を利用していたり、教育相談にも乗っていただけたりすることを知って、親としても大変心強いなと思いつつながらお話を聞かせていただいていた。適応指導教室での活動も写真や資料をいろいろ見せていただいていた。適応指導教室に通うお子さんたちが少しずつ外に出かけたり、ボランティア活動したりしながら、いずれは

学校・学級に戻っていけるように子どもたちをご支援していただいているということがわかりました。そのボランティア活動のことで1つ気になったのですが、さつまいもの収穫祭などは子どもたちが大好きで、自然に触れることで自信のなかった子どもたちが「じゃあ、やってみようかな」と自信がつくよい機会ですが、その中で子どもたちに「役割」を与えてみてもいいのではないかなと思いました。私のしているボランティア活動の1つで200冊ほどの図書を無料で貸し出すという活動をさせてもらったことがありました。そのときに我が子たちも一緒についてきて、特に「これをして」と役割を与えたわけではなかったのですが、自然と来てくれた人に「これ、どうぞ」と声をかけたり、小さなお子さん連れの人に絵本を出してあげたりして手伝ってくれていました。役割をこちらから持たせたわけではなかったのですが、自分たちにできることをして自信をつけて「これは、ぼくたちでもできた」という責任とまではいかないかもしれませんが、正義感と言いますか、そういったものが芽生えたようなところがありました。そういうことも子どもたちがしていけるといいのではないかなと思いました。

研究所： 今、とても大切なことを言っていただきました。去年も含めてここ2年くらいは、コロナのこともあって、なかなかそういった課外活動ができない状況にありました。でも、やはり普段の活動はもちろんすごく大切なのでそこは大切にしつつ、また違う機会として一歩外に出てみるなど、今まで何かできないと思っていたことができるような機会が子どもたちにとってとても大切だなと感じています。なかなか、この子どもたちを連れて行くということはまだできていないのですが、学校とかに行かせていただいて不登校のお子さんとかの相談に当たると、親御さんからフリーマーケットで販売するとき、学校では全然しゃべらないけれども一緒についてきて、おつりなどをわたす活動に取り組めて自信につながり、成長することができたといったお話を聞くこともあります。何か今のご意見を参考にさせていただきながら、できたらいいなと思います。展覧会するときなどは、先生が来てくださったときに作品の説明を少し自分たちですということでも少しがんばっている姿もあるのですが、また何か方法を探せていけたらなと思います。ありがとうございます。

委員： 以前、ご縁があって「JAGUAR の部屋」に通う小中学生で不登校のお子さんが週一回火曜日に来られていました。そのときに、少しずつ役割を与えてやってみるというのをしている、それが難しい子は私と一っしょに過ごすというふうにして、徐々に徐々にそういう活動をされていくと、学校では難しい活動だとは思いますが、子どもたちにそういう場面が与えられたら、何もないわけではないのですが、もっと広がりができるのかなと思いました。

会長： 今のお話を聞いていると、子どもたちが表現するというのが大事なのかなと思いました。それがいろいろな形でできるようになって自信になり、さらに広がっていくので、まさに発表会などがそうだと思います。自分でやって人に見せるということが表現のスタートになるので、ただそれが今のこの状況ではまた難しいのだと思います。コロナのこともあってその機会が減っていたので、そういうことができなくなってしまったという部分が課題だと思うので、今後いろいろな形でできるようになったらいいなと思います。



委員： 今、夏の研修などの資料が送られてきているので、今年の研修のテーマなどから押し  
の講座があればぜひ教えていただいて職員に伝えたいと思うのですが、どうでしょう  
か？目玉があれば、ぜひ教えてください。

研究所： 今、指導主事がいろいろな分野の先生方に連絡をとって、講師の方を選んでいま  
すので、これが一番というのはないので、ぜひとも先生方のご希望というか学びたいとい  
う意欲を大事にさせていただいて、今年は、人数制限も少し緩和されているのでできる  
だけ対面の方で実際の場所で聞いていただけたらと思います。

研究所： どれも目玉ですが、当研究所の職員も講師としてお話をさせていただきますので、ぜひ  
ともそちらにもご参加いただければと思います。

委員： 去年は、コロナのこともあって人数制限もあってなかなかたくさんの先生方が参加  
することはできませんでした。でも、今年は去年よりも増やしていただいているのです  
ね。

研究所： はい。今年は、少しでもたくさんの先生方にご参加していただきたいと思い、人数  
を増やしてご案内しております。今後また、感染状況を見てということにはなりますが。

会長： ライブ配信も検討されるということでしたね。今はもう、結構いろいろなところで  
ハイブリッドなやり方というか、実際に対面で行いながらライブ配信というのが主流に  
なっていますね。

委員： 今日また感染レベルが下がっているようですね。野球とかを見ているとかなり動員  
もされてきていますね。

研究所： マスクなども外して活動してよいとなってきていますね。

会長： この研修講座では、前にも一度、テーマやニーズとかに合わせて、希望の多いところ  
などを中心にやっていただいているとお聞きしました。それで、少し聞き逃したのかも  
しれないですが、オンライン講座も今年は継続してされるのですか？

研究所： はい。インターネットで見ただけの「NITS」のオンライン講座を先生方には、ご  
案内させていただいています。

会長： 先程の口頭の事業説明の中では、そうお話をされていたのですが、資料の中にそのこと  
が掲載されていないので、ぜひそれも掲載してください。せっかくしていただいている  
取組ですので、ここへ掲載してください。

会長： 他にご意見いかがですか。

委員： 今までの研修会、研究会、分科会などはワンパターンのものでばかりでした。ところが、  
コロナのことが広がってから、私が担当してものでもできないということが増えました。  
それでも、何とかやっというかと思っいろいろなところに聞いてみました。そうすると、  
結局アンケートという形でいろいろなところの状況を把握していきました。それを  
2年、3年と続けてきますと変化が出てきたのです。最初の頃は、コロナが恐ろしいの  
でとにかく集まらない、中止ということが多かったです。ところが、今年あたりは、い  
ろいろなパターンを考えられて、この場合ならオンラインでやるとか、この場合なら  
みんなで一緒にやっていくとか、柔軟な対応で実施されるようになったという報告が  
上がってきました。おそらく学校でも、これから先、いろいろなパターンが出てくる  
のではと思います。一番適切なパターンが何だろうということのを頭に置きながら  
されるのだと思います。これはまさに、この研究所のスタッフの皆さんが取り組ま  
れている一番いい

場所で一番効果的な方法をやっていくということと同じだと思います。そういう意味では、コロナが私たち人間に考える機会を与えてくれたのかなと思います。教育でも、やはり柔軟なパターンというのが必要になってくると思います。先生方のご苦労も遠目から感じているところです。現場では、もっといろいろなことを考えておられるのだろうものが出てくるのではないかと期待しております。

研究所： 学校からも、先程おっしゃっていただいたように、前は人数制限をして活動も制限されていたのですけれども、今年は少しそういったことも緩んできているのかなと思います。また、教員の免許更新制度がどうやらなくなるということで、やはりこれから研修などそれに替わるものを実施するようということも言われていますので、研修で先生方がこれからはしっかりと学んでいただけるように当研究所でも取り組んでまいりたいと思っています。

会長： 7ページのところの研修奨励事業に関してですが、先程の説明では6月に論文作成講習会、8月に研究発表大会・教育講演会を実施されるということでした。これらは、先生方のご支援をいただくということで、研究所が行う事業、取組になるとと思いますので、せっかくしていただきますので、文字としてこの資料にも残していただきたいなと思います。もちろん、報告のところでもかまわないのですが、きっとこの取組を実施されて効果があがるものと思いますので、そういうものとして捉えていただきたいと思います。

他にご意見はありますか？

委員： この「わたしたちの草津」というものは、主に中学年の社会科というのをイメージして作られているのですね。かつては、環境や自然などもイメージして副読本を作られていたこともあったのですが、そういうものは今のところ予定はないのでしょうか。

研究所： はい。今のところはそういう予定はございません。よくご存じでらっしゃって、教科書センターには、今までの歴代の先生方が作ってくださった自然のことであったり、歴史のことであったりする副読本がたくさんございます。

会長： 自然に関しては、県で作られているものはありますね。環境に関するものになると思いますが。草津のオリジナルという意味では、今は作られる予定はないということですね。

委員： どうしても、中学年の子どもたちと地域の課題や地域のものについて知っていくというのは必要だと思うのです。環境についても琵琶湖があるので学んでほしいのですが、環境というのはいわゆる教科書というのにはなれなくて、やはり副読本が必要になってくるのではないかと思うのです。そういう意味で、人権の問題でもいろいろな課題があるけれども、その地域ごとの課題に応じた取組をなさいという流れがあるのではないかと思います。それこそ、大枠の課題ではなく、その場所その場所の課題を見つめることが大事なのではないかなと思います。

委員： 私も何年前に副読本「ふるさと草津の人物」の編集委員をさせてもらいまして、取材などをさせていただいて、編集作業に携わりました。本校では、まだその副読本を社会科の延長として活用していたださっていますが、やはり「わたしたちの草津」の使用頻度に比べたら活用は少ないです。3、4年生の社会はやはり草津のことを学んでいくので、教科書は全国的なことを書かれています。この副読本には草津のことが詳しく書

かれていますので、市内のどこの学校も使われています。でも、「ふるさと草津の人物」の方は、そこまで知られていないこともあって、やはりだんだんと使われなくなってきているように思います。

研究所： ただ、道徳などの地域教材として使っていただいている場面はまだありますし、あの内容を読んでいただけると地域の人についてよく分かっていただけますね。

委員： 「ふるさと草津の人物」は今でも、私たちは活用していますよ。いろいろ分かりやすいですから。

委員： そうですか。ありがとうございます。

会長： ここまで、十分な話し合いをしていただけたかと思います。

それでは、今、ご説明いただきました事業①から⑤について、これらを令和4年度の事業としてこの運営委員会で承認するという事を諮りたいと思います。ご承認いただける方は挙手をお願いします。

委員全員が挙手

ありがとうございます。全員ご賛同いただきましたので、承認とさせていただきます。これで司会を下ろさせていただきます。ありがとうございました。

研究所： 会長、ありがとうございました。運営委員の皆様におかれましても、慎重なご審議、ありがとうございました。次回、第2回の運営委員会は、令和4年2月2日に実施いたします。同じく午後3時30分より予定しておりますので、ぜひご参加をよろしく願いいたします。

いろいろな角度からご意見いただきまして、大変ありがたく、今後の参考にさせていただきたいと思います。今後とも、教育研究所の活動にご支援いただければ幸いに存じます。本日は、ありがとうございました。